

樋口一葉入門（二）

植村邦正

An Introduction to Ichiyô's Works (2)

KUNIMASA UEMURA

まえがき

前稿の入門（一）では、一葉の学歴・教養の大略と、一葉と和歌との関係を述べた。小説の解説では、初期の作品五篇と中期の作品二篇を述べた。本稿では、それ以後の作品について解説しようと思う。

⑧ 雪の日

（梗概）両親を早くなくした薄井珠^{たま}は、三歳のころから伯母の手一つで育てられた。薄井家は格式の高い家で、家訓として他郷の人と縁組をしてはならないというのが厳存した。珠は成長し、師に当たる桂木一郎を愛するようになる。伯母は例の家訓を盾に二人の仲を許そうとしない。珠は悩み抜いた挙句、伯母の留守のある雪の降る日、男恋しさに家を逃れ出て桂木の許へ走った。幾年かの後、珠は伯母がそれを苦にして死んだと聞き、おのれの非を悟り悲しむのであった。

- これも田辺花圃のすすめで「文学界」にのる。
- このころから「文学界」同人との交流が多くなり、以下多くの作品を同誌にのせるようになる。
- このころ、すでに桃水の文学的価値をあまり認めないほど、一葉は作家として長足の進歩を遂げているが、反面、桃水への異性としての思慕の情はいよいよ強くなり、その心情を空想的に発展させたのがこの「雪の日」の小品ともいえる。
- 家の格式を重んずるところといい、雪の日、師を慕いつつ、珠がとぼとぼと歩くところの描写は、半井桃水を恋する一葉の姿が投影されたものであり、このことは明治25・2・4の日記に、桃水を尋ねた雪の日のことを書いた最後に、「雪の日といふ小説一篇あまばやの腹稿なる」と記しているところを見てもわかる。
- なお、一葉の文体の特徴の一つであるので、本文に関係のある俚諺・和歌などを挙げておく。（以下同じ。）

- ・蝶よ花よと育て上ぐ ・玉^{きず}に瑕 ・人目の関 ・壁に耳あり ・腸^{はらわた}を断つ
- ・男女七歳にして席を同じうせず（礼記・内則篇）
- ・雪降れば冬ごもりせる草も木も春にしられぬ花ぞ咲きける（古今六冬・紀貫之）
- ・さきだため悔^いの八千度^{たび}悲しきは流るる水のかへり来ぬなり（古今十六哀傷・閑院）
- ・みなかみのすめるをうけて行く水の末にもにごる名をば流さじ

(風雅十七雜下・大江広秀)

- ・忍ぶれど色に出でにけりわが恋は物や思ふと人の問ふまで(拾遺十一恋一・平兼盛)
- ・変すてふ我が名はまだき立ちにけり人知れずこそ思ひそめしか

(拾遺十一恋一・壬生忠見)

- ・みちのくにありといふなるなとり川なき名取りては苦しかりけり

(古今十三恋三・壬生忠岑)

- ・人の親の心は闇にあらねども子を思ふ道にまどひぬるかな(後撰十五雜一・藤原兼輔)
- ・むらさきのひともと故に武蔵野の草はみながらあはれぞと見る

(古今十七雜上・読人しらず)

- ・深山木のかげのこ草は我なれや露しげけれど知る人もなき(新勅撰十二恋二・伊勢)
- ・山里は冬ぞ淋しさまさりける人目も草もかれぬと思へば(古今六冬・源宗千朝臣)
- ・ふればかくうさのみまさる世を知らで荒れたる庭に積もるはつ雪(新古今六冬・紫式部)

⑨ 琴の音

(梗概) 渡辺金吾が四歳のとき、母は父のろくでなしに愛想をつかして家を出た。それからの父は大酒を飲むようになり、二人の着物もなくなり、あげくの果てに父は松の木の下でのたれ死にをしてしまう。あとに残された金吾は盗人とさげすまれ、心もねじけてしまった。年は十四歳になっていた。

さて根岸のあたりに、森江しづという年老いた女主人の家があった。そのまわりをたえずうさんくさい乞食小僧がうろついている。十月のある霜の夜、老女のひく琴の音は天上の楽にも似ていた。この妙なる琴の音を聞いた一人の男は心を清められ、真人間に立ち直った。

この老女こそ金吾の母であり、この真人間に立ち直った一人の男とは、母へのうらみも忘れて、光明と希望に満ちた人生へ、一步を踏み出した金吾その人の姿であった。

○ 題名は源氏物語須磨の巻にある五節の君の歌

琴の音にひきとめらるる綱手繩たゆたふ心君知るらめや

によったものという。あるいは、平家物語卷六「小督の事」の条で、仲国が小督の爪音にひかれ行くところを連想したのかも知れない。

○ 下谷竜泉寺町に引き越してからの第一作。

○ この作品は、一葉と親しかった「文学界」同人の平田秃木を介して「文学界」の浪漫思想の影響を受け、芸術至上主義的な傾向が強い。

○ この芸術至上主義の思想は、秃木を通して、イギリスの批評家・小説家であるペイター(1839～1894)の審美批評からの影響が大きいとされているが、安田保雄氏は「比較文学論考・第三篇」の中で、森鷗外訳の「即興詩人」の影響の方がより大きいと指摘しておられる。

○ さらに保田氏は上著の中で「琴の音」と「即興詩人」との関連を、次の箇所を引いて例証づけておられる。すなわち、「即興詩人」の主人公アントニオがローマの劇場でオペラを見、そこで歌女アヌンチャタの妙なる歌に魅せられる。これは渡辺金吾が森しづの琴の音に魅せられるところと極めて類似しており、「琴の音」の最後を「金吾はこれより百花爛漫の世に出でぬ」と結んだ理由も、即興詩人として世に出るアントニオと対照することによって、より深く理解できるとしておられる。

○ 本文に関係のある俚諺・漢詩文など

- ・悪事千里を走る
- ・酒は天の美禄(漢書・食貨志)

- ・秦^{でん}甸の一千余里，凜々^{りんりん}として氷^し鋪^しき，漢家の三十六宮，澄々^{ちようちよう}として粉飾す。

(和漢朗詠集上 秋十五夜)

- ・和^{くわし}氏の璧^{たま}（連^{れんじよう}城の璧）

楚人の和氏が楚の山中で璧（宝玉）を得て，厲王に献じたが，ただの石だとしてしりぞけられ，最後に文王に宝玉として認められ，「和氏の璧」と称せられるようになった（韓非子・和氏）。のち，この璧が趙国に伝わり，秦の昭王が十五城をもってこれと交換することを請うたので，「連城の璧」ともいう（史記）。

⑩ 花ごもり

（梗概）瀬川の未亡人お近は，倅^{せがれ}の与之助と六つ違いのお新とをゆくゆくは夫婦にしようとして育てて来た。与之助は今法学士となり二十四歳，お新は与之助の従妹で十八歳，お新は器量のよい利発な娘で，つつましく，二人の間には恋らしい気持も芽生えていた。

ところが，与之助をカルタ会で見初めた某省次官の愛嬢田原広子の家から，人を介して縁談を申し込まれる。それからというもの，お近は亡夫の親友であった人の未亡人お辰と共謀し，与之助の将来のため，田原家の娘広子との縁組を画策し，お新をある絵師のところへ奉公に出し，体よく二人を引き離すこととなった。義理ある人のため，おとなしいお新は苦情もいわず，あきらめの中に泣く泣く家を出，甲斐に隠棲する貧乏絵師黒瀬のところへ去って行く。

- 一葉の作品には，こういうお新のような封建制下の女性が数多く取り扱われている。
- 「花ごもり」は尾崎紅葉の「男ごころ」（明治26・10）と類似点が多い。すなわち，
 - a. 両者とも青年の母が五十過ぎの未亡人で，一人息子の出世を願っている。
 - b. その青年と同居する娘がいずれも孤児である。しかし血縁関係にある。「花ごもり」のお新は十八歳，「男ごころ」のお京も十八歳。
 - c. とともに一人の男の前に二人の女性が登場し，男は親のすすめる女と結婚を強いられるため，他のもう一人の女が悲劇におわる。
 - d. とともにある人物が母に協力して青年の恋を妨害する。
 - e. 男はどちらも女々しく決断力に乏しい性格の持主である。
- お新と与之助は六つ違い。「闇桜」の千代と良之介，「ゆく雲」の桂次とお作もともに六つ違い。これは一葉の許婚であった渋谷三郎が一葉と六つ違いであったことを意識していることかも知れない。
- 本文に関係のある俚諺・俗謡・古典・漢文・和歌など
 - ・青雲の志 ・玉に瑕^{きず} ・心の雲 ・心の月 ・胸に一物^{いちもつ} ・いたちの道切り
 - ・埒^{うち}があく ・茶にする ・手玉にとる ・恨み骨髓に徹す ・子故の闇に迷ふ
 - ・運は天に在り ・五里霧中 ・鬼か蛇^{じや}か ・一筋縄ではいかない ・娘十八番茶も出花
 - ・鯉の滝のぼり ・二の句が継げない ・詞に花を咲かす^{ことば} ・案ずるより産む^うが易い
 - ・手も足も出ない ・青筋を立てる ・海に千年山に千年（海千山千とも）
 - ・梅^{ばばあ}千婆としなびて居れど驚なかせた事もある（俗謡）
 - ・足るを知る者は富む（老子） ・玉石混淆（抱朴子）
 - ・月かげばかりぞやへむぐらにもさはらずさし入りたる（源氏物語・桐壺）
 - ・不義にして富み且つ貴きは我に於て浮雲の如し（論語・述而・第十五章）
 - ・子曰く，疏食^{そしき}を飯^{くわ}ひ水^{みづ}を飲み肱^{ひじ}を曲げて之を枕とす。楽しみまた其の中にあり（同上）
 - ・馬鹿にしゃんすな昔は花よ，驚なかせたこともある（都々逸）
 - ・人間五十年^{げてん}下天の内をくらぶれば夢幻^{ゆめまぼろし}の如くなり（信長公記・謡曲）

- ・人の一生は重荷を負ひて遠き道を行くが如し（世上、家康遺訓と伝えられる）
- ・君をおきてあだし心をわが持たば末の松山波も越えなむ（古今二十・東歌）
- ・みわたせば柳桜をこきまぜて都ぞ春の錦なりける（古今一春上・素性法師）
- ・つつるつの井筒にかけしまろがたけ過ぎにけらしな妹見ざるまに（伊勢物語二十三段）
- ・くらべこし振分髪も肩すぎぬ君ならずして誰かあぐべき（同上）
- ・ふじのねの煙も猶ぞ立ちのぼるうへなきものは思ひなりけり

（新古今十二恋二・藤原家隆）

- ・玉の緒よ絶えなば絶えねながらへば忍ぶることの弱りもぞする

（新古今十一恋一・式子内親王）

- ・花散らす風のやどりは誰か知る我に教へよ行きて恨みむ（古今二春下・素性法師）
- ・色見えでうつろふものは世の中の人の心の花にぞありける（古今十五恋五・小野小町）
- ・紫の一本故に武蔵野の草はみながらあはれとぞ見る（古今十七雑上・読人しらず）
- ・行末のとまりはいづくわたの原雲の波路に日は暮れにけり（続古今十羈旅・藤原良兼）
- ・しほの山さしでの磯に住む千鳥君が御代をば八千代とぞなく（古今七賀・読人しらず）

⑪ やみ夜

（梗概）旧家松川家の二十五歳のお蘭さまは、大きな家に玄関番の老夫婦佐助・おそよにかしずかれて、ひっそりと暮らしている。ある日、門前でひき逃げ事件がおこり、負傷した十九歳の青年高木直次郎を松川家で介抱し、それが縁で青年はいつしかその書生役をするようになる。

ある時、今を時めく衆議院議員波崎漂より女文字の手紙をお蘭さまが受け取る。波崎は彼女の婚約者であったが、今では父をおとし入れた仇ではないかと疑っている人物である。手紙には今一度会ってよりをもどきたいと書いてあるが、彼女は少しも心を動かさない。

一方、高木はその手紙を持って来た男の車の紋所から、波崎が自分をひいた張本人と知る。彼は復讐の念に燃えるが、相手が自分の主人の恋人と思い込み、両者の板ばさみとなって進退極まって自殺しようとする。その心根を知ってお蘭さまは感動し、高木を自分の心の夫だとまで言って死を思いとどまらせる。

さて、ある日、高木は波崎が演説会を終えて会場を出る所を襲い、一太刀あびせておいて逐電してしまう。その後、お蘭さま・佐助夫婦も行方知れず、旧邸も人手にわたってしまった。

○ 結末がぼかされているのは、後の「にごりえ」の心中事件と似ており、すべてを読者の想像に任せ余情を持たせる手法。これは一葉作品の常套手段である。

○ 今までの作品に登場する女性は純情一路か、男にだまされても義理人情のしがらみに泣くだけの者が多かったが、ここでは男から来た恋文を全く信用せず、その甘言にもだまされず、真実の愛かどうかを見極める能力を持つ女性が描かれており、それだけ自我に目ざめた女性を描いている。

○ 政治家と政商との不正な結託を批判している点、萩の舎の助教として国家の大本を説き、国是の道を講じ、社会の浄化に挺身しようとしたことと時期的に一致する。

○ この作品には古典を踏まえて書いているところが多い。すなわち、

a. 第一章の書出しのところは、源氏物語の夕顔の巻を模している。

b. 枕草子からは、この小説の第九章のはじめに、「秋は夕ぐれ。夕日のさして、山の端いと近うなりたるに、鳥のねどころへ行くとて……」（第一段・春はあけぼの）を、第五章では、「夏はよる。月のころはさらなり。闇もなほ螢のおほく飛びちがひたる」（同上）を模している。

c. 平家物語からは、この小説の第六章に、「波の底にも都のさぶらふぞ」（第十一章・先帝身投）を取り入れている。

d. 徒然草からは、この小説の第二章のはじめに、「人間の種ならぬぞやむごとなき」（第一段）を取り入れている。

○ その他、本文に関係のある俚諺・漢文・和歌など

- ・身から出たさび ・正直の頭に神宿る ・腸が煮え返る ・袖振り合ふも他生の縁
- ・わたる世間に鬼はない ・運は天にあり ・鬼か蛇か ・浮世は夢 ・花に嵐
- ・恩をもってうらみに報ず ・根掘り葉掘り ・医は仁術 ・後髪を引かれる
- ・千里一足 ・心機一転 ・雲を霞 ・惚れて通へば千里も一里 ・憎まれ子世に憚かる
- ・胡蝶の夢（莊子・齊物篇） ・水魚の交はり（三国志） ・精神一到何事かならざらむ（朱子） ・たふれてのち已む（礼記） ・槿花一日の栄（白楽天・放言詩）
- ・大廈のまさたふれんとするは一木の支ふる所にあらず（文中子）
- ・小萩原まだ花咲かぬ宮城野の鹿やこよひの月に鳴くらむ（千載三夏・藤原敦仲）
- ・世の中は何か常なる飛鳥川きのふの淵ぞ今日は瀬になる（古今十八雑下・読人しらず）
- ・面影に花の姿を先立てて幾重越え来ぬ峰の白雲（新勅撰一春上・藤原俊成）
- ・みちのくのしのぶもぢずり誰ゆゑに乱れそめにしわれならなくに
(古今十四恋四・河原左大臣)
- ・伊勢の海の海人の釣り縄うちはへてくるしとのみや思ひわたらむ
(古今十一恋一・読人しらず)
- ・花みつつ人待つ時は白妙の袖かとのみぞあやまたれける（古今五秋下・紀友則）

(3) 後期（明治27・12～明治29・5）

この期は、商売もうまくいかず、家賃もとどこおりがちで、借金もふえたので、店をたたんで下谷龍泉寺町から、本郷丸山福山町に移住して作家生活に専念するようになってから、二十五歳で死を迎える時までである。

一葉はこのころから、実社会の経験も豊富になり、また紅葉・露伴の影響もあって、人間心理を写實的に描写し、同じ雅俗折衷文ながら、会話の部分に当時の東京の風俗的語彙を巧みに用いて現実性を一層増し、文章もきびきびとひきしまった、以前のよ

うな美文調の多い、内容の空疎なものから、格段に上達した時代である。これにはいくつかの理由がある。

- a. 上流婦人の多い萩の舎の者たちが、社会を見つめる眼を持たず、少女趣味的で、なんらの進歩もないのに失望し、何とか自力でこれからの小説界へ飛び込んで行こうとしたこと。
- b. 「文学界」の若い人達が、自我の拡張を求め、浪漫主義の旗印しのもとに立ち上がったのに刺激されたこと。
- c. 「文学界」の客員戸川残花が、彼女に森鷗外の「水沫集」や内田不知庵訳の「罪と罰」を貸して、社会の圧迫に対する反抗精神をつけさせてくれたこと。

作品名	掲載書目	掲載年月
⑫ 大つごもり	文学界	明治27・12
⑬ たけくらべ	全 上	全 28・1～29・1
⑭ 軒もる月	毎日新聞	全 28・4
⑮ ゆく雲	太陽	全 28・5
⑯ うつせみ	読売新聞	全 28・8
⑰ にごりえ	文芸倶楽部	全 28・9
⑱ 十三夜	全 上	全 28・12
⑲ この子	日本乃家庭	全 29・1
⑳ わかれ道	国民之友	全 29・1
㉑ 裏紫	新文壇	全 29・2
㉒ われから	文芸倶楽部	全 29・5

- d. 吉原に近い下谷龍泉寺町通称大音寺前での生活を通して、現実の庶民生活に接し得たこと。
- e. さらに丸山福山町に住んで売春婦の生活を見聞したこと。
- f. 人生の苦をなめつくして、虚飾のない真の自分の生き方をつかんだこと。

⑫ 大つごもり

(梗概) 山村家の女中お峰は、幼時父母をなくし、ただ一人の伯父に引き取られ、十七歳まで育てられたが、伯父の家の生活は楽でなく、いくらかでも生活の足しになるようにと女中奉公に出たのだった。山村家は資産家だが、女中の使い方といったらひどいものであった。そんな中でお峰は一生懸命働いた。一方、お峰の伯父は秋から病気で、商売の八百屋の店も閉じ、万事売り食いの、わびしい裏長屋住居をしていた。

十二月のある日、久し振りに伯父の家に帰ったお峰は、あまりの貧窮ぶりに涙ぐむ。伯父は病気でたおれた時、高利貸しから十円の借金をし、その利息だけでも払わなければ、年の瀬も越せない有様であった。お峰は、お給金の前借りでもして何とかその利息の二円の金をこしらえようと約束して家を出る。

山村家の総領息子石之助は、継母の冷たさに十五歳の春からぐれ出して、今では親に金の無心をしては派手に遊びまわる放蕩三昧の毎日であった。

いよいよ大晦日、お峰は今日の昼過ぎ伯父に約束の金を渡さねばならず、恐る恐る、先日奥様に頼んでおいた借金を申し出る。ところが奥様は、先日自分で承知しておきながら、今日になってそんな金は出せぬという。そんなところへ伯父の子の八歳になる三之助が、何も知らずに金を取りに来る。切羽詰まったお峰は、勝手知った掛硯の引き出しから、束になった金のうち、二円だけを取り出して三之助に渡して帰らせる。夕方、石之助は相変わらず父親に無心をして五十円をせしめて、また遊びに出かけてしまう。

さて、大晦日の晩、主人や奥様たちが集まって、家中の金を集め年末の総勘定がはじまる。例の硯掛も取り寄せられる。絶体絶命のお峰は、事露頭の暁は、始終を白状し自殺して詫びようと決意している。いよいよ掛硯の金を出す段になる。と、中から一枚の紙切れ。それには「硯の引き出しの分も拝借いたし候」とある。

そのため、お峰の罪は分からずじまい。これ、孝の余徳か、石之助が事情を知って罪をかぶってくれたのか。それなら石之助はお峰の守り本尊であろう。どうなったか後のことが知りたいたと、一葉の感想をもって文を結んでいる。

- 丸山福山町に転居後の第二作であるが、生活の窮迫から何とかのがれたいとの気持を心奥に持ちながら、金を中心に動く現実社会の人間像を、西鶴などの手法をまねながら、写実的に描いた最初の作品といえる。転居後第一作は⑩でのべた「やみ夜」。
- お峰の行為を一葉は感情としては肯定する立場に立って描いている。事実一葉にも萩の舎で二円の金を盗んだという濡れ衣を着せられたことがあった。
- 石之助の置証文のためお峰の罪がばれずに済んだが、これはお峰をかばうために石之助が仕組んだことか偶然かは誰にも分からない。しかし、一般にはかばう方に重点を置いて考える人が多い。こういう臚化表現は一葉の作品に多い。
- 石之助のモデルは一葉の兄虎之助。
- 貧ゆえの盗みという人間としての極限条件を社会問題に結びつけず、人情小説にとどめたのは、やや突っ込みが足りないうらみがある。
- 明治30年前後より社会小説・深刻小説が、広津柳浪や一葉と交際の深かった川上眉山等

によって書かれる直前に位置する作品である。

○ このころの一葉は、生活の極度の窮迫から、観相家の久佐賀義孝や小説家の村上浪六らに借金を申し込んだがうまくいかず、生きる望みを失いかげ、精神的にも物質的にもどん底の苦しみに喘いでいた時代である。このことを先ず念頭においてこの作品を読む必要がある。

○ 本文に関係のある俚諺・和歌など

- ・悪事千里を走る ・正直の頭に神宿る ・四苦八苦 ・埒があく ・屠所の羊
- ・金が敵の世の中 ・見ると聞くとは大違い ・心は二つに身は一つ ・子は三界の首枷
- ・濡れ衣を着る
- ・春深きみ山桜も散りぬれば世をうぐひすの鳴かぬ日ぞなき(続古今十六哀傷・醍醐天皇)

⑬ たけくらべ

(梗概) 吉原遊廓につづく下谷大音寺界限は土地柄子供までませて勢力争いをしている。横町組は鳶の頭の子の、十六歳になる長吉を餓鬼大将にして、表町の田中屋の、十三歳の正太郎たちと張り合っていた。千束神社の夏祭の夜、人望のある龍華寺の藤本信如を味方に頼んだ長吉は、横町組を引き連れて正太郎組の遊び場をおそった。その遊び場にちょうど大黒屋の美登利が居合わせた。彼女は正太郎と仲よしで、お転婆で器量よしで、今を時めく遊女を姉に持った、わがまま一方の女であった。正太郎組はさんざんにやられ、側杖を食った美登利も草履を投げつけられるという屈辱に、これも信如の指し金かと、平素彼に好意を寄せていただけに一層くやくしく思った。

さんざめく周囲にも、いつか淋しい秋の訪れとともに、彼女は次第に女らしくかわっていった。道で信如の後ろ姿を見送って立ち尽くすようなこともあった。

やがでにぎやかな酉の市が来た。正太郎も長吉も三五郎も相変わらずだったが、美登利だけは物思わしげに引きこもり勝ちであった。ある風雨の日、美登利の家の前で下駄の鼻緒を切って困っている信如にも、いつになく気おくれして、鼻緒の材料にと紅の友禅の布切れを持ち出しながら、手渡しえないでいる彼女であった。

冬の寒さの身にしみるある霜の朝、美登利の家の格子門に造花の水仙がさし入れてあったが、その翌日は信如が家を離れて仏教学校に入学する日であった。

○ 一葉の傑作の一つ。

○ 最後のところの描写がぼかされているのは、例の一葉の常套手段。

○ 「たけくらべ」の題名は伊勢物語第二十三段の次の二つの歌から取っている。

つつみつのみづつにかけしまろがたけすぎにけらしな妹見ざるまに
くらべこしふり分髪も肩過ぎぬ君ならずして誰かあぐべき

○ 吉原年中行事を背景に、思春期の男女のほのかな恋の芽生えを抒情性の強い筆づかいで描いている。

○ 少年少女の淡い恋が別れで終わる点は露伴の「風流微塵蔵」(明治26・1～28・4)と共通する。

○ 美登利が友の前で信如の悪口を言う所と、紅葉の「二人女房」(明治24)のお銀が男の悪口を独白調で述べる所とよく似ている。

○ この小説の主人公美登利は藤本信如にほのかな愛情を持ちながら、ふとした事から憎しみを持つようになる。これは、恋しい人半井桃水の品行芳しからざる噂(これは多分に誤解であるが)を聞いた一葉の、愛と憎しみの心の揺れ動きを投影させていると見ることもできる。

- この小説は、以上のほか、次のいろいろの点から論じられている。
- a. 人力車夫の息子の三五郎が貧乏人の代表として描かれており、一葉の同情の眼が絶えず彼に向けられている。
 - b. リアリズムに裏打ちされた詩情があふれている。
 - c. 物語はにぎやかな夏祭りではじまり、晩秋・初冬の交に終わるが、その間に、移り行く人の心や吉原の季節感がくっきりと描き出されている。
 - d. 俳句によって鍛えられた西鶴流のきびきびしさが如実に表われている。
 - e. 抒情性が浮き上がり過ぎて、吉原の社会悪を徹底して描けず、中途半端に終わったきらいがある。
 - f. 美登利の肉体上の変化（初潮のあったこと）と心境の変化を示すことによって、将来の彼女の不幸を暗示するとともに、人肉の市に対する女性としての強い抗議をしている。
 - g. 登場人物にはそれぞれモデルがあるが、一葉はそれらの面影を借り、そこに金貸しの娘であり、父親を早く失い、許婚者に裏切られた自身の悲しみを告白しているのだという説もある。
- 古典を踏まえている箇所を拾い出して見ると、
- a. 第六章の書き出しのところは、竹田出雲等のつくった時代物浄瑠璃「義経千本桜」の鮎屋すしの段で、平維盛が世をしのぶため、鮎屋の下男弥助と名をかえたところから取っている。
 - b. 第九章は枕草子の「思はむ子を法師になしたらむこそはいと心苦しけれ。さるは、いと頼もしき業を、ただ木の端などのやうに思ひたらむこそいとほしけれ（第五段）からとっている。
 - c. 第十一章の終わりのところに、源氏物語・帚木巻の「雨夜の品定め」に基づいて書かれた所があり、第十二章のはじめのところに、若紫巻を踏まえて書いた所がある。
 - d. 第十六章の終わり部分に、信如が美登利の家の格子門のところに水仙の造り花を投げ入れる所は、近松浄瑠璃「夕霧阿波鳴渡」に出て来る「我が身を横に投げ入れし水仙清き姿なり……」を思い浮かべさせる。
- 「たけくらべ」に影響を与えた外国文学に森鷗外訳の「即興詩人」があると、安田保雄氏は「比較文学論号・第三篇」の中で述べておられる。その中から主な類似の部分拾ってみると、
- a. 「たけくらべ」（一）の書き出しの吉原大門と見かえり柳とは、「即興詩人」の書出しのバルベリニ広場と半人半魚の神トリトンにヒントを得ている。
 - b. 「即興詩人」で万聖祭からクリスマス・新年に至る年中行事を追ってローマの風物が描かれているのに対し、「たけくらべ」では、春の夜桜から夏の燈籠・秋の仁和賀という吉原の三大行事がくり広げられている。
 - c. 「たけくらべ」（二）で、千束神社の祭の前、長吉たちが正太郎たちに喧嘩けんかを売ろうとたくらみ、信如を仲間に引き入れようとするところは、「即興詩人」の「媒」の中でベルナルドオが美少女に会うため、そのなかだちをアントニオに頼むところと相応ずる。
 - d. 「たけくらべ」（五）の千束神社の祭礼は、「即興詩人」の「謝肉祭」に相応ずる。
 - e. 「たけくらべ」（十四～十六）で、吉原の廓くわを背景に少女期に別れを告げる美登利の姿は、「即興詩人」の「歌女」で、猶太廓から姿を消し、やがて美しい歌女ユダヤとなって登場するアモンチャタの姿に相応ずる。

f. やがて僧となる運命をになう信如は、「カップチオ」僧の寺の稚児で将来僧になるはずであったアントニオに応ずる。

g. 「たけくらべ」(十四)で、美登利が遊女風の島田に結って吉原廓に入っていったことを話し合う正太と団子屋の背高の会話は、「即興詩人」の「歌女」で、美しい歌女の姿に心奪われるベルナルドオとアントニオの会話に相応する。

h. 「たけくらべ」(十六)の結びに近いところにある文、「龍華寺の信如が我が宗の修業の庭に立ち出づる……」は、「即興詩人」の「みたち」の中の「我行末のために修業に門出せんとす。」に相応ずる。

○ その他、本文に関係のある俚諺・俗謡・漢文・和歌・俳句など

- ・朝題目に夕念仏 ・恩に着せる ・鼻の下が長い ・朱に交はれば赤くなる
- ・明日のことを言へば天井で鼠が笑ふ
- ・打つや太鼓の音も澄みわたり……(長唄・越後獅子)
- ・沖の暗いのに白帆が見える、あれは紀の国蜜柑船(俗謡・かっぽれ)
- ・明烏夢の泡雪(新内・鶴賀若狭掾)
- ・わたしゃ父さん母さんに、十六七になるまでも蝶よ花よと育てられ、それが曲輪に身を売られ、……今では勤めも馴れまして……(厄介節)
- ・百夜も通ふ恋の関、君が情の仮寝の床の、枕かたしく夜もすがら……(歌沢・香に迷ふ)
- ・我ものと思へば軽き傘の雪、恋の重荷を肩にかけ、妹がりゆけば冬の夜の、川風寒く千鳥なく、待つ身につらき置炬燵、ほんにやる瀬がないわいな(端唄・歌沢)
- ・北廓全盛見わたせば、軒は提灯電気燈、いつもにぎはふ五丁町、むかしにかはらぬ別世界、春は桜を植ゑならべ、秋は燈籠に初にわか、毎日毎晩客の山、日曜旗日は猶のこと、三味せん太鼓の絶え間なく、シャンシャンシャンの手を揃ひ、これも勉強するが為、勉強するのめさとの為、全盛ぢゃ全盛ぢゃ 愉快ぢゃ愉快ぢゃ、万歳万歳万万歳
(男仁和賀・福島中佐の内・全盛歌)
- ・忍ぶ恋路はさてはかなさよ、今度逢ふのが命がけ、よごす涙の白粉も、その顔かくす無理な酒(端唄・歌沢)
- ・開いた開いた何の花が開いた、蓮華の花が開いた(わらべ歌)
- ・まはれよまはれ水車、流るる水のよどみなく、くるくるまはれ水車
(明治26・小学唱歌集)
- ・楊家に女あり初めて長成し、……一朝選ばれて君王の側にあり(長恨歌)
- ・遂に天下の父母の心をして、男を生むを重んぜずして女を生むを重んぜしむ(同上)
- ・去る者は日に以て疎く、来たる者日に以て親し(文選・古詩)
- ・如是我門(阿弥陀経) ・天柱折れ地維欠く(史記・三皇紀)
- ・たらちねはかかれとてしもうばたまのわが黒髪を撫でずやありけむ
(後撰十八雑四・遍昭)
- ・夕されば野辺の秋風身にしみて鶉鳴くなり深草の里(千載四秋上・藤原俊成)
- ・物言へば唇寒し秋の風(芭蕉)

— 未 完 —